ＴＯＫＹＯ美人と、東京１００ストーリー

新妻の悩み　①　３回連載（００１　台場）

穂高健一

井伊佳元が急ぎ足で、東京湾の品川沖に浮かぶ、お台場にむかっていた。約束時間は昼の12時ちょうどだった。かれはすでに15分も遅れていた。面識のない、真鍋美紀（まなべみき）から、遅れないでくださいね、とかれは念を押されているのだ。

（遅れたことで、なん癖（くせ）をつけられ、厄介なもめ事になるかもしれない）

井伊は会うまえから、身構える自分を知った。

お台場は幕末につくられた洋式砲台（品海砲台）だった。第三台場は海面から突きだす石垣で囲まれている。一片が１６０メートルの正方形の要塞（ようさい）。いまでは台場公園になっている。そこまでは松林がつづく、弓なりの長い人工の砂州で結ばれている。

井伊はともかく急いだ。46歳だが、体力と脚力には自信があった。真横には、優雅な白いレインボーブリッジが架かる。そのむこうには赤い東京タワーが屹立する。それらと腕時計を交互にみた。もう20分が過ぎようとしている。井伊は松林の木漏れ日を蹴（け）ちらすような、走りとなった。

台場公園に入った。石垣の土手は小高く、雑木の疎林と、古い砲台が目につくていど。中央部は低い構造で、芝生の広場になっていた。疎林の土手には数組のカップルと、老夫婦が東京湾の情景を楽しむように、のんびり散策する光景があった。

息切れを整えながら、かれは周辺を見わたした。真鍋美紀らしき人物はまったく見当たらなかった。

「どうなっているんだ？　ここまで持ってこさせながら……。８５００円もするハム・ギフトだ。お金は払われているから、悪質な、嫌がらせとはおもえないし」

井伊は手提げに袋に入ったギフトの包みをみた。それは『自宅配送』で、一度は『宛先住所不明』で、セーフティー池袋店にもどってきたものだ。

井伊は首をかしげながらも、要塞の中央部に降りてみた。火薬庫や玉薬置所の跡、兵舎の礎石が残る。民家や公共の建物などは一棟もなかった。

「ひとが住む場所じゃない。こんなところを届け先にして。くそっ。あの電話の女は、どんな神経をしているんだ」

かれは2時間前の電話を思い浮かべた。セーフティー池袋店は10時開店だ。その直後のことだった。レジ・チーフから、ギフト品が未着のクレームです、店長ご指名です、と手に追えない口調で電話がまわされてきた。

店長を呼びだすクレームは、厄介なものが多い。電話に出るまえに、井伊は未着だったギフトを持ってこさせた。『自宅配送』となると、自分の家だから、住所が不備だったとは考えにくい。ヤマト宅配便の担当者は、伝票に記載された電話をかけているはずだ。番号が間違っていたのか、それとも通じなかったのか。いずれにせよ、不可解な出戻りギフトだ。

「大変お待たせしました。店長の井伊です」

「おたくの店から、12日午前中の配達指定で、お願いしたハムのギフトが届いていません。どうなっているんでしょうか？」

真鍋美紀の声から判断すれば、さほど怒った口調ではない。年齢は30歳前後に思えた。

「……品物は宛先不明で、当店にもどってきています」

「過ぎたことはあれこれお話しても、仕方ないことですわ。きょうの正午、12時ちょうどに、店長さんが直々に遅れないで持ってきてください。それが誠意でしょ」

「12時ちょうど。これからだと、ちょっと厳しい」

「ダメなんですか」

「わかりました。ひとつ確認させてください。住所は、港区台場1丁目第3台場。その先は……？」

「それで間違いありません。第3台場だけです。江戸時代につくられた、要塞のお台場で、いまは台場公園になっています。わかりやすい場所です」

真鍋美紀の声は話すほどに、品のよい響きを感じさせた。

「ご自宅か、事務所があるわけですね、そこに……」

「台場公園内の真鍋美紀、それだけでわかります。店長さんが直接持ってきて来てくださいね。いいですね。時間には遅れないでくださいよ」

指定された場所にはどこか曖昧なものを感じた。これ以上、突っ込めば、相手を疑うようで気が引けた。

「わかりました。お約束の時間にはうかがいます。もうひとつ確認させてください。電話番号ですが……」

自宅配送伝票に記載された番号と、彼女がいったものとは間違っていない。井伊はどこか納得できないまま、電話を切った。

セーフティーは一部上場会社のスーパーマーケットである。池

袋店は二階建てで年商13億円。池袋には西武、東武、パルコ、三越など大型デパートが集中する、激戦地だ。セーフティー池袋店は負けっぱなしの永久赤字店舗。ギフト商戦などは正面から戦う余地がない。

８５００円もするギフトとなると、数少ない大切なお客だ。店長みずから届けてもよいと、井伊は池袋から台場公園までやってきたのだ。肝心な届先の相手が見つからない。そのうえ、相手のケイタイは何度かけてみても、通じない。真鍋美紀にはなにかの意図があって、この台場公園で手渡しで、ギフトを受け取るつもりだったのか。

「おれの店は、どうせ、こんな客ばかりだ」

かれは惨めたらしい気持ちに陥った。

東京湾をなでる風には初冬の冷たさがあった。コートの襟を立てたかれは、念のために要塞の四方の土手を回りはじめた。

レインボーブリッジの主塔が屹立する。豪華な中型客船がその橋下を静かにくぐり抜けていく。海面は11月の陽光で銀波のようにさざなみ立つ。遠く近くにカモメが飛来する。

（約束時間から20分遅れたから、真鍋美紀は怒ってさっさと立ち去ったのか。嫌がらせで、日をあらためて持ってこさせるつもりなのか）

かれはこれ以上、ここで待つだけ時間のムダだと思った。他方で、空腹を意識した。

かれは妻と別居の身で、東京・下町の借家に一人で住む。朝はたいがい7時15分に最寄駅に着き、立食い蕎麦ですませる。会社では11時半ころ、昼食を取るのが常だ。さすがに腹の虫がなる。

ここからの帰り、お台場海浜公園駅、新橋駅、池袋駅、このうち、どこか駅前でランチを食べよう。どこがよいか。そう考える井伊は、その足を帰路の砂州の方に向けた。

台場公園の入口からは、コートを着た30代前半の女性が現れた。顔立ちの良い女性だ。着衣も、化粧も、装飾もセンスが良い。こちらを意識している。それだけで真鍋美紀だとわかった。

「セーフティー池袋店の井伊ですが……」

歩み寄ったかれは、横書きの【店長　井伊佳元】の名刺をさし出した。

「お名前は、いいかげん、とお読みするんですか」

「ちがいます、いいよしもと。佳元は、よしもと」

「失礼しました。いいかげん、なんて。親はそんな名前をつけませんよね」

彼女はくすっと笑った。笑顔がきれいだ。

「子どもの頃から、いい加減

な奴だと、よくからかわれたものです。名付けた、向島の祖父を恨んだ時期もあった」
「台場に着いてからも、ずっと待ってくださるなんて、誠意ある人。けっして、いい加減じゃないひとです」
「15分も、どこに隠れていたんですか？」
「高いところです」
「鳶や鷹ように、真上を回って、見張っていた？」
井伊の視線が、浮雲のただよう上空を旋回した。
「面白いわ。わたしの住まいは、あの台場ビューマンションの12階です。走っている店長さんの姿が見えましたから、降りてきました」
彼女は振りかえって高層マンションを指した。
「そういうことか。これがお届けのギフトです」
「あら、お持ちになってくださったの。別に必要ないのに」
「えっ？」
井伊はおどろきの目をむけた。
「離婚の相談に乗っていただくために、ギフトを届けてもらったのです。届け先をマンションにすると、夫がいつ何時帰ってくるかわからないし……。この台場公園にさせてもらいました」
「離婚？　初対面なのに、別れ話の相談をもちかけられても……？」
井伊は怪訝な顔をした。
「いい加減さんの裏稼業は、別れ話の請負人だと聞いて、セーフティー池袋店に訪ねました。こういうことは店員さんのいる側で話しづらくて……。そこでギフトを注文してから、ちょっと手の混んだことをして、いい加減さんに、みずから足を運んでもらう手だてをとったのです」
「あなたには二つの間違いがある。いい加減じゃない、井伊佳元。もう一つはスーパーの店長で、裏稼業はもっていない」
「隠さないでください。店長は表の顔でしょ。裏では腕の立つ稼業をおもちだと聞いています」
「だれが、そんな根も葉もない噂を流している？」
井伊にはまったく心当たりがなかった。
「情報の出所は語らない。それを条件に、セーフティーの店長を教わりました。どこまでも内密だ、とかたく念を押されています。……人間関係のしがらみで、苦むひとを助けてくださる、正義のお方だと聞いています。離婚、惜別、引き裂く、決別、それを成せば、幸せが転がり込んでくる人間が大勢いる。死別を待つだけでは、それまでの人生がじつに不幸。それが信条だと聞いています」

「そんな信条は持ち合わせていない。裏稼業も」
「わたしを突き放さないでください。離婚しても、深いシコリを残さずに別れさせてくれる。そんな極意をもった達人でしょ。わたしの離婚を請負ってください」
彼女がくり返し頭を下げた。
「おれは、いま女房と別居している。自分の離婚もままならないのに、他人の離婚の世話などできない」
「良い知恵を貸してください。おねがいします」
彼女の澄んだ眼が必死に訴えていた。
「いま何歳なの？」
かれはあえて訊いてみた。
「夫ですか。二つ年上で、34歳です」
「すると、あなたは32歳だ。数え年でいえば、33歳の女の厄年だ。厄年が過ぎれば、夫婦関係はよくなるさ」
「教科書的なお話を、ここでうけたまわる気はないんです。わたしは結婚して一年半、耐えに耐えてきました。もうがまんできないんです」
「単なる、夫婦の仲違いじゃないの。結婚して一年半は、まだ新婚だ。これから夫婦のいい味がでてくるはずだ。すこし辛抱してみたらいい」
「深刻な状況なんです。ここで解決してくださらなければ、わたしは取り返しのつかない、生涯の苦しみとなります」

彼女の顔には暗い影が横切っていた。
「おれのほうこそ、結婚20年、別居ちゅうのトウが立っている女房とかけ合って、離婚させてもらいたい。こっちが裏稼業人に頼みたいくらいだ」
「夫と会わず、一刀両断に離婚を決めてください。わたしが裏稼業の井伊さんに、こんな依頼をしたと、夫には知られたくないのです。ゼッタイ内密にしてください」
「頼まれても、亭主に会う気はないさ。それよりも、この際は夫婦で、互いの好い点をみつける努力をしたほうがいい」
かれは突き放す口調でいった。その足は帰路に向かった。砂浜は弓なりで、板張りの散策道になった。
「冷たい言い方。見棄てないでください」
真鍋美紀が追いすがり涙声になった。
かれは足をゆるめながら横目で、彼女みた。真鍋美紀がハンカチを取りだし、目頭に当てていた。男は女の涙に弱い。身の上話を聞くだけでもいいかな、とかれは思った。
「なにが嫌なんだ？　亭主の」
「わたしの料理の味に対して、夫はいつも『お袋の味』と比べるんです。

女にとって、姑と比較されることが一番イヤなことです。家事を手伝う振りして、イチイチ口を出してきます。結婚するまえは、こうも細かいことをいう男性だ、とは思いませんでした。なにかと気を使ってくれる、やさしい人に思えたんです」
「あなたには男をみる目がなかった？　ある種の自業自得だな、それは」
「上手にごまかされていたんです。食事の味付けについて、夫は毎食のように、実母と比べ、ことのほかうるさいんです」
「すきっ腹に堪える話題だな」
「お昼は未だですの？」
「どこかの、誰かが12時ちょうどに、指定してくれたからな。店を飛びだし、途中で食べている時間的な余裕などなかった。駅からここまでも、走ってきたくらいだ」
　かれは砕けた語調でいった。
「すみません。20分遅れたから、お食事はすませてこられたのかと思いました。私はすませましたけど、井伊さんがまだなら、食事とお茶ができるところで……」
　彼女は台場に心当たりの店があるロぶりだった。
「そうしょう」
　井伊は心のなかで、クレーム処理にきて、素敵な女性とランチが取れるとは、思わぬ拾い物だと妙な冥利をおぼえた。
「義母と同居しているの？」
「いいえ。義母さんは静岡です。週に一度は新幹線で訪ねてきます。結婚後、ずーとです。それも嫌なんです」
「息がつまる話しだな。毎週、黒船が来航してくるようなものだ」
「上手い。ぴたりです。ここはお台場ですものね」
　彼女には笑顔がもどってきた。
「いま、この海はおだやかだ。約１５０年前の黒船来航や幕末の騒動が信じられないくらい」
　かれは立ち止まって、あえて東京湾を一望した。品川埠頭の船舶、レインボーブリッジ、手前に視線を引くと、静かな砂浜の渚にはカモメが群れて遊ぶ。
　井伊のもどってきた視線が、真鍋美紀に向けられた。彼女の涙は乾いていた。
　その一方で、井伊はまわりのカップルの女性と見比べる自分を知った。真鍋美紀のような美しいはまずいない。こうして肩をならべられるだけでも、男自慢に思えた。

「世の中が乱れると、有能な人物が出てくる」
　１８５３年に黒船来航してから、韮山代官で、有能な江川太郎左衛門英龍（えがわたろうざえもんひでたつ）が、幕府の海防掛勘定吟味役格に抜擢された。江川によって品川沖にいくつもの砲台の台場が作られたのだと、かれ

は簡略に説明した。
それと同時に、かれは肩をならべる二人の歩調を意識した。
「日本史には、くわしいんですね」
「全部じゃない。苦手なのは縄文式、弥生式の時代だ。奈良時代からは大好きなんだ。子どものころから、夕食を忘れて、歴史の本を読むから、『食べたくないなら、食べさせないから』と母親から食事を干されたことが、何度もあった」
井伊はここでひとつの策を考えた。……真鍋美紀とおなじ時間を過ごすならば、意図しない裏稼業の相談相手よりも、彼女の興味と関心を日本史へと引き込む。そのほうがこちらは楽しいと思った。
真鍋美紀がふいにコートのポケットからナッツを取りだした。水際や海面から飛び立つカモメが、待ち構えていたかのように、頭上で群れて啼く。彼女の手もとの周辺を舞う。
一羽のカモメでも両翼を広げると、恐怖をおぼえるほど大きい。彼女が高く小粒のナッツを投げた。
群れたカモメが荒々しく旋回する。最も俊敏なものが嘴（くちばし）でキャッチしていく。ほかのカモメたちがさらなる餌をねだってわめく。

「夫は動物嫌いで、神経質で、家のなかで鳥を飼えば汚れるといい、インコもかわさせてくれないんです。だから、カモメがわたしのお相手なの」
「動物嫌いはおれもおなじだ。とくに犬嫌いだ」
「可愛いのに」
彼女はその一言で話題から外れ、5粒ほど上空に投げた。
井伊は無言で、カモメをいつまでも相手にする彼女を見つめていた。他方で、時間の経過を気にした。このさき食事をすれば、店舗への帰りがかなり遅くなるはずだ、と。
セーフティー池袋店は赤字店舗で、会社のトップからはお荷物扱いで、収益など期待されていない。喜ぶのは人事部だけだ。応募してくる新卒採用の学生たちに、池袋で土地買収が進めばデパートまで格上げしたい、と見せかけるリクルート店舗だ。社内ではそんなふうな陰口がたたかれている。
当然ながら、経費予算は削りに削られている。慢性的な人手不足だ。店長みずからトラックで搬入されてくる商品の荷受から、夕方のレジ打刻、クレーム処理、夜には生鮮作業場の洗い掃除まで、なんでもやらざるを得ない。
一部上場会社の、セーフティー池袋店の店長だといっても、名ばかり。そのうえ、優秀なチーフ社員は回されない。店長が一人がんばったところで、売上成績はいつも全店で最下位の部類だ。

池袋店に赴任する店長は、出世の道が断たれた、最も窓際の管理職だといわれている。
（きょうくらい羽を伸ばすか）
こんな日にかぎって、本社から鬼の営業統括部長が店舗巡回に来たり、厄介なクレームが起きたりするものだ。そんな予感がする。そのときはそのときだ。いまは真鍋美紀と一緒に食事しにいく。その期待だけに切り替えるべきだと思った。
「義母さんは週に一度でも、来るのが不定期なんです。だから、いつこられるのかと、わたしの神経は休まりません」
彼女はなおもカモメに餌をやるのだ。群れが一段と大きくなったカモメは狂ったように、騒ぎつづけていた。
「予告なし、とは気が休まらない話しだ。いつもキッチンや部屋をきれいに片付けておく……。神経が疲れるな」
「同情してくれますか。国立劇場の観劇の帰りに寄らせてもらったわ、と突然マンションに現れるのです。電話一本もなく。まるでペリー提督のように」
「その認識はまちがっている。米国はオランダ経由で、大統領の親書を持ったペリー提督を日本に訪問させると、徳川幕府に伝えていた。事前予告で、紳士的な国だ」
「徳川幕府は、黒船来航を知っていたんですか」
「もちろんだ。アメリカは、あんたの亭主の母親よりも、礼節を尽くしていた。ところで、ペリー提督が江戸時代に、日本にはじめてきたアメリカ人だ、と真鍋さんは思い込んでいないかな？」
「ちがっているんですか」
「黒船来航よりも7年前、１８４６年には、東インド艦隊司令長官のビッドルが、米国大統領の親書をもって浦賀にきている。もちろん、開港を求めてだ。ビッドルもペリーもおなじ東インド艦隊司令長官だった」
「黒船よりも、7年前に、アメリカの提督がきていただなんて……。学校で教わらなかったわ」
「学校教育はやたらペリー提督の黒船来航を強調しすぎている」
尊皇攘夷と叫ぶ鎖国派が、明治政府を作った。遅ればせながら、開国に動いた。だから、明治政府は、ペリー来航が東京湾で放った儀式の空砲を、大砲の脅しだといい、徳川幕府がそれに屈服し弱腰で、日米和親条約を結んだという。開国したのは外圧だと、弱い徳川幕府だと作り上げた。徳川はその実、植民地政策を採らないアメリカと最初に開国する腹でいたのだ。警戒したのは英仏の植民地政策だ。
実際、ペリーよりも、ビッドル提督が東京湾にやってきたときのほうが、大騒ぎだった。
幕末の歴史はそこから動きだしている。徳川幕府は海防の準備

に入った。やがて、ペリー来航で、江戸城に近い品川沖にも、洋式砲台（品海砲台）が作られた。
「わたしの離婚に話題をもどしてもいいですか」
「どうぞ」
かれは歴史話しに未練を残す口調でいった。二人はふたたび散策道を歩きはじめた。
「義母さんはマンションに来るたびに、食器の後片づけができていないわねとか、掃除機だけでなく、雑巾がけもやらなければね、と皮肉たっぷりにいったりするんです。窓ガラスの桟にも埃がたまるものよと、ことこまかく申すのです。もう耐えがたくて」
彼女は指先で、桟をこすってみせる義母の仕草をまねた。
「まあ、どこの家庭でもそうだ。結婚すれば、嫁姑の関係は大なり小なりつきまとう。世間どこでもある話だ。姑がイヤだから、といって夫婦が別れていたら、生涯に何十回と離婚しなければならない」
「夫の態度も許せないんです」

「亭主は、なんといっている？」
「母がくるのは週に一度だから、わたしが我慢すればいい、母親の小言などイチイチ気にすることない、聞き流しすればいい、そんなふうに言います。母親には寛大で、すべてが母親の見方、意見に賛成なんです。もう耐えがたくて」
「そりゃあ、亭主がよくない。ここは行動を起こしてみることだ。一切合財、料理を作らない、掃除も、食器の片づけも、洗い物もやらない。亭主のあなたが手本を見せて、とストライキだ」
「それだと……。静岡の義母さんが来て、息子にそんなことをやらせていると、しっぺ返しを受けます。なにを言われるか想像もつきません。わたしはきっと負けてしまいます。義母さんがこれまで以上に、指先で、隅々のガラス窓の桟をこするかと思うと、ぞっとします。おねがいです、わたしたちを離婚させてください」
「いきなり離婚はむずかしい。正面から戦えば、泥沼で、傷が深まる。ここはすぱっと別居してみることだ。亭主に反省をうながす意味からも」
「反省など、期待していません。夫には」
「困った夫婦だな」
「何もかも嫌なんです」
「別居するか、さもなければ、台場のマンションに篭城（ろうじょう）するか。ここは、あなた自身が決めることだ」
かれは終止符を打つ口調でいった。
「別居したあと、井伊さんは責任を持って、わたしたちを離婚を

成立させてくれますか」
「さっきも言ったとおり、おれは別居ちゅうの身だ。離婚もままならない男だ。自分の女房一人にてこずっている」
「約束してください」
「別居したら、会って話は聞く。結果は保証できない」
「別居します。井伊さんが離婚まで、わたしのアドバイザーになってくれる、と信じて。作戦を授けてください、別居の口実を」
真鍋美紀は立ち止まって、正面から向かいあった。彼女の眼は真剣に光っていた。
「それはかんたんだ。男がいちばん嫌うことばを、面と向かっていう。『あなたはマザコンよ。もうマザコンのあなたと暮らせません。明日、家を出ていきます』といえば、亭主はストレートパンチを顔面に打たれて、マットに倒れたような状態になる。別居は引き止められない」
かれはボクサーが繰りだすストレートの真似をした。
「マザコンは事実ですから、言えます。離婚の、明るい光が見えてきました」
「いい笑顔だ」
「レストランはもうすぐです」

「おれの腹の虫が感謝して、輪唱をはじめている」
井伊の携帯電話が鳴った。それは営業統括部長だった。いつまで店を空にしている、すぐ池袋店に帰ってこい、と威圧的なことばが耳の奥に飛び込んできた。

（つづく）

写真協力・福本恵子さん（国際イメージコンサルタント）
【本文とは関係ありません】